



いやす  
なおす  
たもつ



文書館資料にみる  
病気・医療・健康

10

病気と祈り③

「疱瘡守札」(吉田家文書〔上関町〕368-2)、「雪舟筆鍾馗像木版」(安部家文書 1379)

## 疫病と疫神

疫病（伝染病、はやりやまい）には天然痘（疱瘡・痘瘡）・麻疹（はしか）・赤痢・コレラ・インフルエンザ・癩・結核・梅毒などがあげられます。こうした病気は人や物の往来に伴い、これまで存在しなかった地域にも伝播し、世界的に流行するようになったと考えられています。

これらの病気に対して、昔の人々は「疫病をもたらず神」（疫神）をイメージし、その疫神をもてなしたりやつけたりすることでその病から逃れようとしてきました。

「疫神をもてなす」とは妙なふうに見えるかもしれませんが、実際には、「疫神をもてなした家（の子孫）を疫病から守る」のも、また疫神のなせることと考えられていたのです。

たとえば上の札（左）の「若狭小浜組屋六郎左衛門」は 16 世紀後半の若狭の実在の豪商ですが、彼が疱瘡神を手厚くもてなしたことから、六郎左衛門の名を書いた札を貼った家には入らない約束をして疱瘡神が去っ

たという伝承に基づいています。同様の例に、「蘇民将来之子孫」札やあわびの殻に「ささら三八宿」と書いて疫病除けにするものなどがあります。

それに対し、上の鍾馗（しょうき）像（右）は美祢市の南原寺に伝わる「割れ鍾馗」とよばれるもので、疱瘡除けの神として信仰され、殿様へ差し上げた記録も残っています。こちらは、鍾馗の強い力を借りて疫神を降伏させようとの心意が働いています。

また、裏面の絵は、天保 14 年（1843）に筑紫の天草（天草は実際には肥後）に現れ、「今後 3 年間疫病がはやり人が多く死ぬ」と予言したという神霊で、その姿を絵に描いて日々見ることによって、その病難を免れるといっています。この神霊は、はたして疫神でしょうか、はたまた疫神を調伏する神なのでしょうか。

もてなしたり、避けたり、調伏（ちょうぶく）したりと、人々は硬軟とり混ぜて疫病と対峙（たいじ）しました。



大正初期と思われる置き薬「蘇命散」の袋です。ここでは、鍾馗が調伏した疫神を左脇に抱え込んでいる姿が描かれています。（佐川家文書〔大島町〕646）

# 疫病を予言し、避ける神霊

「疫病除天草神霊画」（吉崎家文書 415）



天保十四年のとし 此神霊は  
 つくし（筑紫）天草といふ処の山中に  
 あらハれ出て ことしより三年  
 のあひた（間）は あしき病  
 はやりて 四方の  
 人あまたかの  
 病におかされ  
 死すると告給へるとや  
 されと此怪異なる  
 神像を画きて 日々  
 ミるときハ その難をのかるゝといふ  
 （三本足で、木の葉をまとっている  
 ようにみえます）